川崎ジュニア文化大賞

おさがりが教えてくれたこと

旭町小学校　６年生　平沢　環奈

「おさがりもらうのっていやじゃないの？おさがりよりも、新しい服のほうがよくない？」と、ある日友達に言われた。もちろん新しい服を買ってもらうのもうれしいけれど、私にとっておさがりはただの古い服ではなかった。

私は小さいころから姉からのおさがりが楽しみだった。私にとって姉はあこがれで、「早く大きくなって姉が着ている服が着たいな、早くおさがりこないかな」といつも楽しみにしていた。まだ着ている姉に早くおさがりするようせがんでけむたがられることもよくあった。

うちには姉妹おそろいの服を着て出かけている写真がたくさん残っている。写真を見ていると、姉と一緒の服でお出かけをして、うきうきしていた自分を思い出す。自分が着ていた服が小さくなって着られなくなっても、姉からのおさがりがくればさみしくなかった。姉が前まで着ていた服を自分が着ると、まるで私が姉に近づいた気分になってうれしかった。

姉はとても大事に物を扱う性格だ。おさがりの服がボロボロだった記憶はない。学校から帰ってくると、きれいにランドセルを置いていたし、本もシリーズ別に、サイズ別にていねいに並べている。服も同じでくしゃくしゃに丸めてしまっているところを見たことがない。だからどの服もひとつひとつが特別な服に見えた。

おさがりの中でも、一番思い出があるのは新体操のレオタードだ。私たちは三才から習い始めたが、小学校上級生が着るレオタードは格別だ。幼児クラスのものはピンク色のフリフリがついているかわいいものだが、小学校高学年になると、こい青色のレオタードに金色のラインが肩からおへそのあたりまで入っているかっこいいデザインを着るようになる。しかも、レオタードにはお母さんにつけてもらった銀色のスパンコールと、全部で二〇〇以上あるラインストーンが全体についている。高学年になると難しい技や、連携技にも挑戦するようになる。練習では何度も手具を落として失敗している人たちをたくさん見てきた。だけど、本番であのキラキラのレオタードを着ると、まるで魔法にかかったように難しい技をいくつも成功させていた。広い会場で光るラインストーンのひと粒ひと粒が努力と苦労を表しているようだ。私もあんな魔法にかかってみたいと思った。だから、おさがりでレオタードを受け取った時、魔法がかかるまでの努力や苦労を一緒に引き継いだような気分だった。おさがりは私にとって、ただ物を受け取るということではなく、気持ちも受け取る特別なも

のなのだ。

しかし、そんな楽しみもだんだんと減ってきている。最近、ちっともおさがりが来ない。私が大きくなって、姉と同じサイズの服を着るようになったからだ。ついこの間までは、心の中で「あの服はこのバッグに合わせたらかわいいな」と楽しみにしていた。成長することはうれしいはずなのに、今は悲しい。小さいころから当たり前のように続いてきた「おさがりをもらう」というお楽しみが終わってしまったように感じた。

そして今、私はおさがりをあげる側になった。先日、サイズが小さくなった服をまとめてリサイクルイベントに出した。袋に詰めるときに、お気に入りだった服や姉妹おそろいで着ていた服を久しぶりに見て、複雑な気持ちになった。お出かけの時に着ていったお気に入りのワンピース、姉妹おそろいで着たスカート、大事にしすぎて実はあんまり着なかったジャンパー…。本当はまだまだ着ていたいから手放したくなかった。一つ一つに思い出があった。もう私が着ることはできないのに、誰かにあげるかと思うとまるで思い出も切り取ってあげてしまうような気持ちになって悲しくなった。だけど、この服たちがこれで終わりになるわけではない。まだ着られる服を捨ててしまうわけではなく、服を必要としている誰かがまた使ってくれるのだ。どこかの誰かのお気に入りになるのかもしれない。そう考えると心が少し軽くなってきた。私はその時、姉が今までしてくれていたことを少しだけ理解できた気がした。

今までたくさん受け取ってきたおさがりの服の、一つ一つに思い出があった。私は姉からのおさがりを通じて、姉のように物を大切にする気持ちを自然と学ぶことができたのかもしれない。物を手放すときに悲しい気持ちになるということは、それだけ大切に使ってきたからこその気持ちなのだ。それまでの自分に胸を張って、また新しく使うものを大切にしていこうと思う。